

日本実験言語学会(JELS) 設立と

学会誌創刊のご挨拶

(会長就任演説要旨)

城生 佰太郎[†]

2008年8月29日(金曜日)の午後13時30分ごろ、筑波大学人文社会学系棟5階B519会議室において満場一致のもと、日本実験言語学会(JELS)は産声をあげた。

言語研究に特化した二大学間分野には音声学と言語学があるが、前者が1650年ごろJohn Wallisによって学問的レベルに到達したのにくらべ、後者がSir Arthur William Jonesによって比較言語学として成立したのは1786年のことであった。すなわち、言語学は音声学の誕生から136年遅れて、ようやく学としての体裁を整えたということである。

その後、音声学には機器を用いた客観的な方法を前面に押し出す実験音声学が1889年に成立した。周知のごとく、フランスにおけるカトリック学院で、Jean-Pierre Rousselot(ジャン=ピエール・ルスロ)師によって開講されたphonétique expérimentale(実験音声学)がそれで、John Wallisが音声学を学としての水準に押し上げたときから起算して、実に239年後のことであった。そうして、2008年8月29日の本日、ルスロに遅れること119年の星霜を経て、ついに筑波大学に集まってくださった有志によって「実験言語学」が公認されるという歴史的瞬間を、私たちは体験したのである！ ちなみに、これは言語学の成立から数えて222年後のことであることを思えば、音声学に対する実験音声学の誕生より17年もはやいことになる。

ところで、「実験」という語にはいろいろな意味があり、多義性を帯びている。比較的多くの領域では、験者が対象に意図的な操作を加えず、虚心坦懐に現象と対峙する場合を「観察研究」と呼び、逆に験者が対象に意図的な操作を加え、その結果の違いから背後にある一般性の高い原理を模索する場合を「実験研究」と呼ぶ。しかしながら、「実験音声学」と近年はやりの「音声科学」との間に明瞭な一線を画す立場に立てば¹、そこにおける「実験」の意味するところはこの限りではない。

すなわち、まずは手の届く範囲で、具体的な現象そのものと対峙するところから実験音声学は出発する。つまり、いわゆるボトムアップ型の帰納的方法によっ

[†] 日本実験言語学会会長

¹ 本稿においては、城生佰太郎(2005)ほかに述べているようにフランスで発祥した実験音声学と、オランダ起源の音声科学(phonetic sciences)とを区別する立場をとる。

て事象を探查するところから研究に着手するのが、とりあえずはこの学問における実験研究のスタートラインなのである。ちなみに、他の学問分野から似たような方法論を用いるものを挙げれば、臨床医学における症例研究をはじめとして、解剖学、岩石学、...などがある。

上に指摘したことからも明らかなように、それぞれの研究領域ごとに異なる目的があり、そこから導かれる方法論にも多様性がある以上、「実験」の捉え方も多種多様であるのは当然である。この点で、幸いなことに、実験言語学会は誕生したばかりである。したがって、まだここに謳っている「実験」には共通理解された定義が存在しない。ということは、これから学会員が一丸となってこれに方向付けをし、納得できるような実験言語学における「実験」の定義を与えてゆくことができるということにほかならない。さらに、あえて言わせていただければ、そうすることこそが学会員である全員の責務でもあると思う。まさに、これぞクリエイティブな、わくわくするような知的活動ではないだろうか。

というわけで、歴史的な今日、2008年8月29日(金曜日)の午後13時30分という時間に誕生した日本実験言語学会(JELS)発展のために、今後とも皆様方のますますのご協力をお願い申し上げます。

(付記)

なお、この学会の名称は、設立話が持ち上がった時点では「実験音声学会」であった。わが国には、ルスの路線に沿って実験音声学に特化した学会がなかったので、それを作ろうとしたわけである。しかし、研究人口の少なさを考慮して、言語学の分野からの援助を頂くこととした。従って、学会の名称こそ「日本実験言語学会」だが、その中身は「実験音声学と実証的な研究による言語学」というのがもともとの趣旨である。ということで、本来は「日本実験音声学・実験言語学会」とすべきところだったが、看板としては長すぎるので省略して「日本実験言語学会」として発足した。

以上の理由によって、少なくとも設立準備委員会レベルでの委員による共通理解では、実験音声学および実証的研究方法を採用する言語学的研究が、この学会において中核をなす研究方法である。会員諸氏におかれては、成立の経緯としてご理解をお願いしておきたい。

【参考文献】

城生佰太郎 (2005)『日本音声学研究——実験音声学方法論考——』勉誠出版(平成16年度科研費による助成出版)